

平成13年度  
開発教育指導者研修報告書

平成14年3月

国際協力事業団

北海道国際センター(札幌)

JICA LIBRARY



1172067(9)

北海セ
JR
01-002

## はじめに

国際協力事業団（JICA）では近年、開発途上国が抱える様々な問題や地球規模の課題への関心を促進し、これらの諸問題に取り組む国際協力のあり方について考える教育である「開発教育」を大変重要なものと理解しその支援に努めているところです。

開発教育を巡っては、平成10年1月に発表された外務大臣の私的諮問機関「21世紀に向けてのODA改革懇談会」の報告書の中で、「開発教育は、国民が地球規模の問題に関心を持ち、国際協力の重要性を理解する基礎として重要」と指摘されており、ODA関係機関による開発教育支援の強化を求めています。また、平成14年度から小学校・中学校の新学習指導要領においては、「総合的な学習の時間」が導入され、各学校で環境、福祉、情報、国際理解等について学校現場の実態に応じた学習活動が行えることになりました。現在、開発教育は学校教育現場のみならずNGO等により行われる市民教育レベルでも高まりをみせており、今後さらに充実される上で非常に重要な時期にあります。

従来から、JICA本部や全国に約20ある国内機関（当センターもそのひとつ）では、開発教育支援として教育現場等からの要望に応じ、海外からの研修員や日本人専門家・青年海外協力隊員OB/OG、またJICA職員らによる「学校訪問・講師派遣（サーモンキャンペーン）」を実施してきており、その要請件数は近年急増しています。

さらに、中学、高校及び大学生を対象に、国際協力をテーマとした「エッセイコンテスト」を毎年実施している他、中学校・高校の先生方を途上国への協力現場を实地に視察していただく「教師海外研修」の機会も提供していますし、当センターに於いて国際協力を理解していただく「高校生国際協力実体験プログラム」や小学生高学年向けのプログラム「親と子の国際協力教室」等各種開発教育支

援に努めて参りました。

そのような流れのなかで、今般初めて、教師及びNGO関係者を対象とした「開発教育指導者研修」を実施することは大変意義深く、学校現場のみならずNGOを含んだネットワークが構築され今後発展していくことが期待されます。

本研修立ち上げにあたっては北海道教育委員会、北海道立教育研究所、札幌市教育委員会、(社)北方圏センター、(財)札幌国際プラザ等からなる打合会を充分に行い、これをベースとした実行委員会を発足させ全体枠を検討すると共に、わが国開発教育分野における先駆者である北海道教育大学の大津和子教授にもプログラム内容や外部講師の推薦等についてご助言・ご協力いただきました。この場を借りて関係各位にお礼申し上げます。

今後も当センターでは国際協力の重要性を地域の方々に認識していただくため、また将来の国際協力の担い手を育成するために開発教育支援に邁進する所存ですのでよろしくご理解・ご指導の程お願いいたします。

北海道国際センター（札幌）

所長 小森 毅



1172067191

研修風景

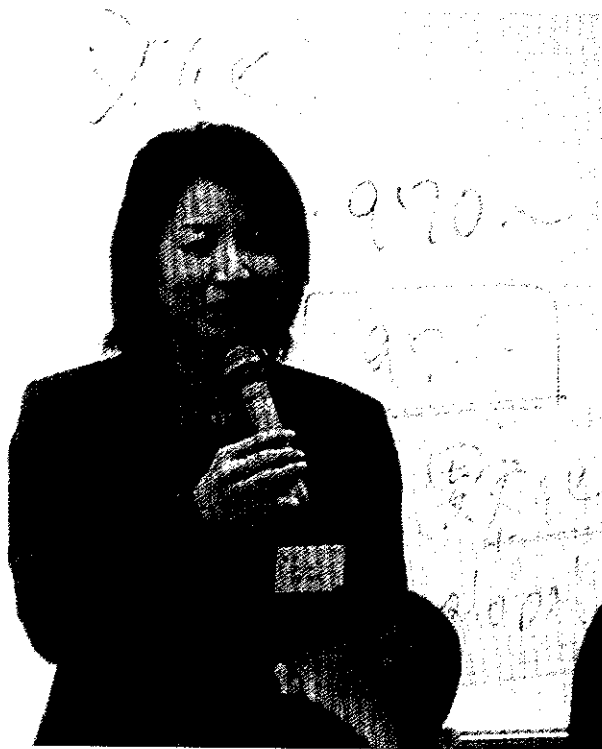


小森所長挨拶



北海道教育大学 大津和子教授

『地球市民を  
育てるために』  
  
総合学習で  
開発教育を  
どう展開するか





平成13年度中学校教師海外研修報告  
旭川市立嵐山中学校 上村 育代 教諭

ザンビアでの研修現場写真で感じ取ったことを参加者それぞれから発表してもらいました



参加型学習手法の学習①  
「貿易ゲーム」

限られた資源と機材で  
どうやって  
製造して  
交易して  
利益をあげるかを  
シミュレーション



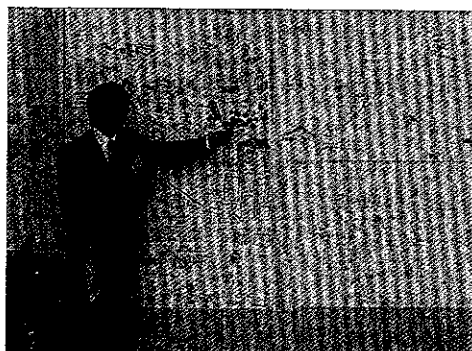
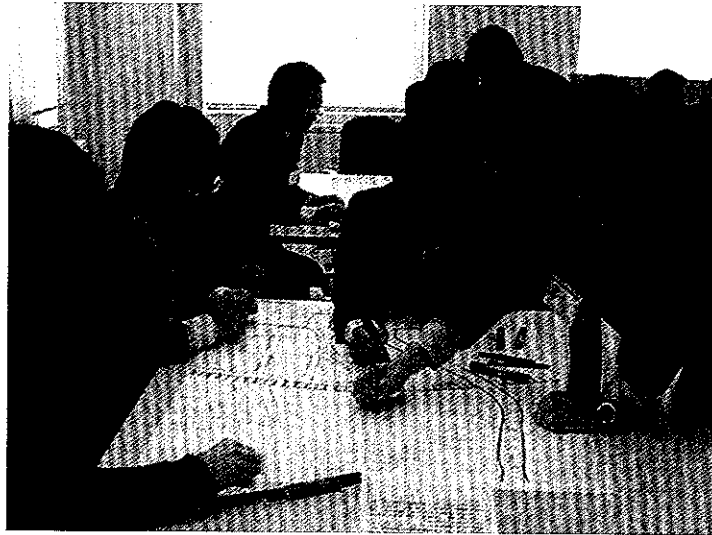
参加型学習のファシリテーター  
開発教育ワークショップ研究会

小泉 雅弘 さん  
都築 仁美 さん



参加型学習手法の学習②  
「宇宙人がやってきた！」

宇宙人  
(=外部からの  
訪問者)に  
自分たちの街を  
紹介する為  
地図を作製



「宇宙人がやってきた！」  
(続き)

首に独特な襟を巻いている  
宇宙人

各街の地球人から  
定住の勧誘紹介を  
受けます



コメンテーター  
酪農学園大学  
高橋一助教授

参加型学習手法の学習  
とりまとめ



青年海外協力隊員OB・OG等との意見交換会



秋元直子OG パラグアイ派遣  
職種 幼稚園教諭



宮地美貴OG パラグアイ派遣  
職種 幼稚園教諭



鷺見美由紀OG マレーシア派遣  
職種 日本語教師



今枝映人OB ソロモン諸島派遣  
職種 体育教師

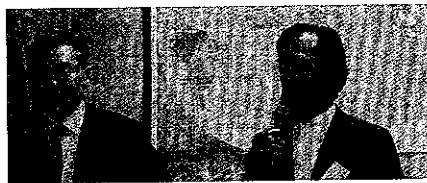


青年海外協力隊員OB・OG等との意見交換会（続き）



袴田信郎専門家OB  
パラグアイ及びボリヴィア派遣  
職種 日本語教師

閉会式（挨拶：北海道国際センター（札幌）総務課千坂課長）



## 目 次

はじめに	
研修風景	
I. 実施要項	頁
0. 表紙	1
1. 目的	2
2. 実施期間	2
3. 実施場所	2
4. 参加人数	2
5. 参加対象者	2
6. 参加費用	2
7. 応募方法	3
8. その他	3
別添1 日程 (含む参加者名簿)	4
別添2 申込書	10
II. 研修概要	
1. 小森所長挨拶	13
2. 大津和子教授基調講演	14
3. 平成13年度中学校教師海外研修報告	17
4. 参加型学習手法の学習	18
5. 参加型学習を行っての全体会議	18
6. 協力隊員等の活動報告・意見交換	19
7. 閉会	20
別添1 小森所長レジメ	21

別添 2	大津教授レジメ	26
別添 3	上村教諭レジメ	29
別添 4	高橋助教授レジメ	37

### Ⅲ. 研修アンケート結果

### Ⅳ. 開発教育指導者研修実行委員会議事録

1.	第一回開発教育指導者研修実行委員会議事録	49
2.	第二回開発教育指導者研修実行委員会議事録	52
3.	「平成13年度開発教育指導者研修」講師打ち合わせ記録	54
4.	第三回開発教育指導者研修実行委員会議事録	56
5.	第四回開発教育指導者研修実行委員会議事録	58
別添	開発教育指導者研修実行委員会メンバーリスト	61

# I 実 施 要 項



平成13年度  
開発教育指導者研修

～実施要項～

主催：国際協力事業団（JICA）北海道国際センター（札幌）

後援：北海道教育委員会／札幌市教育委員会／  
（社）北方圏センター／（財）札幌国際プラザ

## 1 目 的

開発教育については、2002年以降段階的に導入される「総合的な学習の時間」において前向きに取り組まれることが期待されています。このため、本研修は開発教育の参加型ワークショップの紹介等を通して、原則として教員の方々に開発教育の知識を習得して頂き、学校現場において開発教育の担い手となって頂くと共に、併せ市民の途上国に対する関心・理解を促進することを目的に実施します。

## 2 実施期間

平成14年1月10日（木）12時半から11日（金）15時まで。

## 3 実施場所

国際協力事業団 北海道国際センター（札幌）（HICS）

## 4 参加人数

計45名（応募者が参加人数を上回る場合は選考します。）

- ①JICA 北海道国際センター（札幌）管内10支庁（※）教員
- ②NGO 関係者（原則札幌市近郊）
- ③その他関係者（教員研修担当者等）

※；石狩、渡島、桧山、後志、空知、留萌、宗谷、胆振、日高、上川（北部のみ）

## 5 参加対象者

- (1) 道内、小、中、高校の教員（上記4-※管内。以下同様）
- (2) 各地教育委員会の教員研修担当者
- (3) 地域の NGO 団体等に所属し、開発教育、国際理解教育を推進する立場にある者

\*研修の全日程に参加可能であり健康上参加に支障がないこと。また、(1)及び(2)の方については学校長（所属長）から出張（又は外勤）命令が得られる者であること。

\* (3)の参加者については原則札幌市近郊。

## 6 参加費用                      原則、当事業団負担

- ・札幌市内移動に係る交通費は参加者各人負担願います。
- ・札幌市外からの参加者で上記5-(1)及び(2)については勤務地最寄り JR 駅または公共バス停から JR 札幌駅までの旅費を当事業団規程に従い支給します。また、当センターに宿泊を希望する場合は、宿泊代（@6,169 円）を実

費支給しますので、センター宿泊チェックイン時にフロントにて上記金額を支払い願います。

- ・プログラムに予定されている海外からの研修員との懇親会（1月10日夜）を除き、食事代は各自で負担願います。センター内の食堂を利用した場合、1食500～700円程度です。センター宿泊者に限り朝食は自己負担不要です。

## 7 応募方法

上記5-(1)及び(2)の参加募集については北海道教育庁及び札幌市教育委員会経由で行います。申込は、直接北海道国際センター（札幌）宛に12月3日必着で郵送願います。

上記5-(3)の応募者については（社）北方圏センター（NRC）経由で募集通報がされますが、申込についてはNRCに送付下さい。

その後、12月10日を目途に参加受入の可否について連絡致します。

## 8 その他

当センター駐車場スペースが限られているため、公共交通機関にてセンター来訪をお願いします。（最寄り駅：地下鉄東西線南郷18丁目駅）

別添1：日程

別添2：申込書



## 平成13年度開発教育指導者研修日程表

第1日 1月10日(木)

時 間	内 容	場 所 等
12:30～	受付 (参加者リストは別紙1のとおり)	ブリーフィング ルーム入口
13:00～15:00	開会 (5分) 主催者挨拶 (20分) 基調講演 (1時間35分) 講師：北海道教育大学 大津和子教授 『地球市民を育てるために』 ～総合学習で開発教育をどう展開するか～	ブリーフィング ルーム
15:00～15:10	休憩	センター内
15:10～15:50	平成13年度中学校教師海外研修報告 (ザンビア派遣 旭川市立嵐山中学校 上村教諭)	ブリーフィング ルーム
15:50～16:00	休憩	センター内
16:00～18:00	参加型学習手法の学習①：「貿易ゲーム」  コメンテーター：酪農学園大学助教授 高橋一氏  ファシリテーター：開発教育ワークショップ研究会 小泉 雅弘 氏 都築 仁美 氏	会議室1、セミ ナールーム7/8 の2室に分かれ て参加型学習手 法の実践
18:00～	懇親会 (参加予定研修員は別紙2のとおり)	ブリーフィング ルーム

第2日 1月11日(金)

時 間	内 容	場 所 等
09:30~12:00	参加型学習手法の学習②：「宇宙人がやってきた！」 コメンテーター：酪農学園大学助教授 高橋一氏 ファシリテーター：開発教育ワークショップ® 研究会 小泉 雅弘 氏 都築 仁美 氏	会議室1、セミナールーム7・8の2室に分かれて参加型学習手法の実践
12:00~12:30	全体会議 ・各グループからの発表 ・高橋コメンテーターからのコメント	ブリーフィングルーム
12:30~13:30	昼食（個人負担）（アンケート記入）	センター食堂他
13:30~14:00	協力隊のビデオ（「青春の大地（改訂短縮版）」）	ブリーフィングルーム
14:00~15:00	協力隊員等（別紙3参照）の活動報告・意見交換 研修参加者の全体人数により5グループに分けて行う。	会議室1、セミナールーム5、セミナールーム6、セミナールーム7・8、セミナールーム9
15:00~15:10	閉会	ブリーフィングルーム
15:10	解散（アンケート提出）	

## 平成 13 年度開発教育指導者研修 参加者リスト

		氏 名	所 属 先	備 考
1	N-01	佐藤 雅一	北海道YMCA	
2	N-02	阿部 功	北海道地球市民の会	
3	N-03	太田 こずえ	飛んでけ！車いすの会	
4	N-04	川上 久子	(財)日本ユニセフ協会北海道支部	
5	N-05	岡田 佳子	(財)日本ユニセフ協会北海道支部	
6	N-06	小野寺 裕子	札幌YWCA	
7	N-07	成田 康子	札幌YWCA	
8	N-08	渡部 智恵子	緑のそよ風ネットワーク	
9	N-09	梅澤 康	青年海外協力隊北海道OB会	
10	N-10	榎本 晃	札幌ベトナム協会	
11	N-11	山中 恵理子	北海道YMCA	
12	札-01	安孫子 和典	札幌市立東米里中学校	社会
13	札-02	川村 亞里	札幌市立日章中学校	英語
14	札-03	梅沢 詠子	札幌市立藻岩小学校	国語
15	札-04	石川 早苗	札幌市立手稲中学校	美術
16	札-05	佐藤 浩孝	札幌市立大倉山小学校	社会
17	札-06	正武家 重治	札幌市立盤溪小学校	保健体育
18	札-07	三田村 剛	札幌市立幌北小学校	理科
19	札-08	船山 純	札幌市立東橋小学校	国語
20	札-09	工藤 弘美	札幌市立富丘小学校	理科
21	札-10	西潟 麻美	札幌市立八軒北小学校	国語
22	札-11	関口 満壽	札幌市立本郷小学校	
23	札-12	中村 淳	札幌市立月寒小学校	
24	札-13	福岡 翼	札幌市立あやめ野小学校	理科
25	道-01	富田 律子	大滝村立大滝中学校	国語
26	道-02	國島 喜久男	北海道札幌真栄高等学校	英語
27	道-03	柳沢 有美	下川町立下川中学校	国語
28	道-04	白井 啓裕	栗沢町立美流渡小学校	教頭
29	道-05	小川 知子	室蘭市立港北中学校	保健体育
30	道-06	中村 睦月	旭川市立永山東小学校	4年生
31	道-07	村岡 学	静内町立山手小学校	
32	道-08	薬師 文代	余市町立東中学校	理科
33	道-09	千葉 妙子	余市町立東中学校	家庭科・特学
34	道-10	鈴木 邦弘	八雲町立八雲小学校	社会(5年)
35	道-11	佐藤 裕子	旭川市立常盤中学校	英語
36	道-12	星 聡志	比布町立比布中学校	社会、外国語
37	道-13	黒瀬 詩野	七飯町立峠下小学校	

38	道-14	井城 克敏	和寒町立北原小学校	
39	道-15	黒田 秀之	千歳市立北栄小学校	
40	道-16	田中 茂行	北海道札幌厚別高等学校	数学
41	道-17	佐野 聡恵	長沼町立長沼中央小学校	
42	道-18	岡 健	乙部町立明和中学校	社会
43	道-19	吉澤 麻紀子	千歳市立長都中学校	英語、社会
44	道-20	渋谷 俊之	札幌日本大学高等学校	地理
45	道-21	森岡 千香	滝川市立江陵中学校	英語

N- は(社)北方圏センター経由参加申込のNGO関係者

札- 札幌市教育委員会経由教職者

道- 北海道教育委員会経由教職者

## 開発教育指導者研修 懇親会参加研修員名簿

	研修員氏名	呼称	国名	コース名
1	Ms. 尚 尔華	しょう	中国	北海道海外技術研修員
2	Ms. 劉 聰	りゅう	中国	北海道海外技術研修員
3	Mr. KINLEY TSHRING	キンレー	ブータン	北海道海外技術研修員
4	Mr. AMBA DATT PANT	パンタ	ネパール	北海道海外技術研修員
5	Ms. 加藤 愛弓 メルセデス	あゆみ	アルゼンチン	北海道海外技術研修員
6	Mr. 藤戸 英司 アラン	アラン	ブラジル	北海道海外技術研修員
7	Ms. 駒込 理奈 カリン	カリン	ブラジル	北海道海外技術研修員
8	Ms. EMI RIVERO SONE	エミー	チリ	北海道海外技術研修員
9	Ms. ZHENG Zi-Han	キャシィ	中国	エレクトロニクス技術
10	Mr. Upul Meepal AKMEEMANA	ウブル	スリ・ランカ	エレクトロニクス技術
11	Mr. Azman Bin A. RAZAK	アズマン	マレーシア	エレクトロニクス技術
12	Mr. LAKAB Mohamed	ラカブ	アルジェリア	エレクトロニクス技術
13	Ms. Marzieh MOSALLANEJAD	マルジィエ	イラン	エレクトロニクス技術
14	Ms. Reena DONGOL	リーナ	ネパール	エレクトロニクス技術
15	Mr. NTAGWIRUMUGARA Etienne	スティーブ	ルワンダ	エレクトロニクス技術
16	Mr. Victor Hugo PLATA VELAZQUI	ビクトル	メキシコ	エレクトロニクス技術

## 開発教育指導者研修 専門家・協力隊OBリスト

		氏名	派遣国	職種	活動期間
1	専門家	袴田 信郎	アルゼンティン	日本語教師	93/1-95/1
			ボリヴィア	日本語教師	95/6-97/6
2	協力隊	宮地 美貴	パラグアイ	幼稚園教諭	99/07-01/07
3	協力隊	秋元 直子	パラグアイ	幼稚園教諭	98/07-00/12
4	協力隊	今枝 映人	ソロモン諸島	体育教師	98/07-00/12
5	協力隊	鷲見 美由紀	マレーシア	日本語教師	98/07-00/07

## 参加申込書

国際協力事業団  
北海道国際センター（札幌）所長殿

国際協力事業団主催「開発教育指導者研修」の実施要項の内容について承諾し、  
同プログラムに参加を申し込みます。

（ふりがな）

氏名： \_\_\_\_\_ 印 生年月日：昭和 \_\_\_\_ 年 \_\_\_\_ 月 \_\_\_\_ 日

所属先： \_\_\_\_\_ 担当教科： \_\_\_\_\_

所属先住所： \_\_\_\_\_

(TEL) \_\_\_\_\_ (fax) \_\_\_\_\_ (e-mail) \_\_\_\_\_

（以下の質問事項にお答え下さい）

過去に開発教育・国際理解教育関連の研修に参加したことがありますか？ < ある ・ ない >

「ある」とお答えの方は、その研修名・時期についてお書きください。（直近の一例のみで結構です。）

（研修名・時期） \_\_\_\_\_

<所属長記入欄>

上記の者が、国際協力事業団主催の「開発教育指導者研修」に参加することを承認  
します。

平成 \_\_\_\_ 年 \_\_\_\_ 月 \_\_\_\_ 日

所属長（学校長） \_\_\_\_\_ 印

## 参加申込書

国際協力事業団  
北海道国際センター（札幌）所長殿

国際協力事業団主催「開発教育指導者研修」の実施要項の内容について承諾し、同プログラムに参加を申し込みます。

(ふりがな)

氏名 : \_\_\_\_\_ 印 生年月日 : 昭和 \_\_\_\_\_ 年 \_\_\_\_\_ 月 \_\_\_\_\_ 日

所属先 : \_\_\_\_\_ 担当教科 : \_\_\_\_\_

所属先住所 : \_\_\_\_\_

(TEL) \_\_\_\_\_ (fax) \_\_\_\_\_ (e-mail) \_\_\_\_\_

(以下の質問事項にお答え下さい)

過去に開発教育・国際理解教育関連の研修に参加したことがありますか？ < ある ・ ない >

「ある」とお答えの方は、その研修名・時期についてお書きください。(直近の一例のみで結構です。)

(研修名・時期)

<所属長記入欄>

上記の者が、国際協力事業団主催の「開発教育指導者研修」に参加することを承認します。

平成 \_\_\_\_\_ 年 \_\_\_\_\_ 月 \_\_\_\_\_ 日

所属長(学校長) \_\_\_\_\_ 印

(以下については札幌市外からの参加希望者のみ記入)

参加経費(札幌駅迄の往復運賃及びセンター宿泊実費)については下記の口座に振込み願います。(全てカタカナ記入願います。普通・当座のいずれかにマルを。)

振込口座 : \_\_\_\_\_ 銀行 \_\_\_\_\_ 支店

普通  当座 口座番号 \_\_\_\_\_ 名義人 \_\_\_\_\_

勤務地から JR 札幌駅までの交通経路 (バスを利用される場合は運賃と会社名をご記入下さい)

勤務地 \_\_\_\_\_ → \_\_\_\_\_ → JR 札幌駅

(以下の質問事項にお答え下さい)

① センター宿泊を希望しますか？ < 希望する ・ しない >

(石狩支庁管内及び石狩支庁隣接市町村からの参加者でセンター宿泊を希望しない場合は2日分の旅費を支給します。)

② 札幌迄の旅費・宿泊費について自己負担でも参加を希望しますか？ < 希望する ・ しない >



## 参加申込書

国際協力事業団

北海道国際センター（札幌）所長殿

(申込は(社)北方圏センター経由でお願いします)

国際協力事業団主催「開発教育指導者研修」の実施要項の内容について承諾し、同プログラムに参加を申し込みます。なお、研修中の事故についての危険負担は自ら負うことを了解いたします。

(ふりがな)

氏 名 : \_\_\_\_\_ 印 生年月日：昭和 \_\_\_\_ 年 \_\_\_\_ 月 \_\_\_\_ 日

所属団体 : \_\_\_\_\_

連絡先住所 : \_\_\_\_\_

(TEL) \_\_\_\_\_ (fax) \_\_\_\_\_ (e-mail) \_\_\_\_\_

活動概要 : \_\_\_\_\_

(活動概要についてはパンフレット等があれば別添願います。)

貴団体活動に係るHP等があればURL : \_\_\_\_\_

## Ⅱ 研 修 概 要



## 1. 小森所長挨拶

- (1) 国際協力をめぐる近年の動きの中で、1996年のOECD（経済協力開発機構）のDAC（開発援助委員会）による新開発戦略で取り上げられている2つのキーワードがある。それは「自助努力」と「連携」であり、このコンセプトが開発教育に深く関わっているといえる。

これは社会の発展に不可欠であり、これは途上国のみならず、日本のような先進国と言われる国でも重要な点であり、これを尊重した教育がこれからも求められる。

日本独自の生産性向上の取組に「5S」といわれる言葉「整理、整頓、清掃、清潔、しつけ」があるが、これがまさしく、自助努力による和（連携）の社会の根本、日本発展の秘訣と思われる。

- (2) 一方、開発教育について、国内的には1998年にJICAが実施した「開発教育支援のあり方」に関する調査研究があり、開発教育協議会等から有識者が検討委員等として多数参加し、アクションプランが取りまとめられた。本日基調講演を頂く大津先生はなかでもとりわけキーパーソンの大役を果たされた。

当センターとして開発教育に対して様々な支援活動を行っており、例えば学校現場等に講師を派遣して体験談等を披露するサーモンキャンペーンは昨年度55件実施、今年度は第3四半期を了した時点で53件もの要望に応じているように、着実に需要は伸びている。

また、中学生・高校生エッセイコンテストのように生徒達が国際協力について考えたものを表現するための企画もJICAは提供しており、今回参加者のご子弟が特選を受賞（文部科学大臣奨励賞受賞の渡辺沙織さん）し、嬉しく思っている。

- (3) 今回、北海道国際センター（札幌）では、このような開発教育支援への期待の高まりに呼応して、初めて開発教育指導者研修を実施することとなったが、この企画段階から、北海道教育庁、北海道立教育研究所、札幌市教育委員会、NRC（北方圏センター）、札幌国際プラザからのメンバーを交えて、実行委員会を立ち上げ今回の開催までこ

ぎつけることができた。この場をかりて、ご協力いただいた各委員にお礼申し上げる。今回こうして学校関係者とNGOが一同に介した開発教育指導者研修が実施できるようになったのはこの実行委員会が何回にもわたり会議をもって話し合った結果によるところが大きい。

また、プログラムの検討・実施にあたり、参加型学習のコメンテーター/ファシリテーターの推薦を含め、北海道教育大学の大津教授にはひとかたならぬご協力を頂いた。

中学校教師海外研修プログラムに今年度参加され、ザンビアで貴重な体験をされた旭川市立旭川中学校の上村先生には、研修以降、様々な形で JICA 事業に協力いただいております、今回も講師を快諾して頂きました。

開発教育支援について、JICA もまだまだ深めていかなければならないと考えている。

## 2. 北海道教育大学 大津和子教授 基調講演

### 『地球市民を育てるために』

～総合学習で開発教育をどう展開するか～

#### 世界のグローバル化

今日、世界が大きく変動しているが、第二次世界大戦以降約半世紀の間に、著しい転換期をあげるとすれば、1970年代ではないだろうか。当時は、乱暴な言い方をすれば、二つの問題、地球規模の環境問題と核問題が深刻化した。これらの問題を通じて、地球は一つの運命共同体、「宇宙船地球号」であるという認識が生まれた。日本では、オイルショックとトイレットペーパー騒ぎを通じて、私たちの暮らしがいかに世界に依存しているかを思い知らされた。

こうしたグローバルな世界観のもとに、1970年代には（レジメにあるように）新しい教育が次々とうまれ、発展した。異文化理解教育、環境教育、人権教育、平和教育、開発教育は、それぞれ独自の問題領域を扱

い、その歴史も異なるが、いずれもグローバルな視野をもち、学習のプロセスを重視する点で共通性がみられる。

## 国際理解教育の変化

国際理解教育は、第二次世界大戦以降ユネスコによってすすめられてきたが、この国際理解教育も 1970 年代に大きく変化した。すなわち、第二次世界大戦直後の東西冷戦下で重要視されていたのは異文化理解教育であったが（ユネスコ共同学校では人権学習、国連学習も行われていたが）、1974 年ユネスコの「国際教育勧告」により、それまでの異文化理解教育に加えて、グローバルイシューの学習が強調されるようになった。グローバルイシューとは、人類が直面している諸問題で、具体的には環境・資源、平和・紛争、人権、開発などにかかわる諸問題を含む。これらを教育のあらゆる発達段階、あらゆる側面で扱うべきであるとしたのが、「国際教育勧告」である。ここでは、異文化理解中心の国際理解教育を「狭義の国際理解教育」、グローバルイシューの学習をも含む国際理解教育を「広義の国際理解教育」と呼ぶことにする。

この「国際教育勧告」は当時日本ではまったく注目されず、8 年間後の 1982 年によく文部省ユネスコ国内委員会によって翻訳され、「国際理解教育の手引き」が刊行された。そのため、日本の国際理解教育は 1980 年代までほとんど異文化理解教育が中心であった。これを補うかのように、グローバルイシュー学習の重要性を提起したのが開発教育であった。開発教育の刺激を受け、あるいは国際理解教育の名称のもとでの開発教育実践により、1990 年代には国際理解教育の概念が広がってきた。

## 開発教育の発展

開発教育は、欧米で 1960 年代に、かつて発展途上国で活動していた人たちによってはじめられた。かれらが本国に帰国したときに、途上国理解に対する情報があまりにも少ないことに驚き、まず、途上国に対する認識を深めることをめざして、キャンペーンを行ったり教材を作成しはじめた。NGO による救援活動も活発に行われるようになり、一部の学

校教育のなかにもとりいれられるようになった。

日本では1979年に開発教育が紹介され、1982年に開発教育協議会が設立された。当時高校教師であった私は、開発教育という言葉を知らないまま、アジア各地にフィールドワークにでかけては、「1本のバナナから」（国土社）をはじめ、「一匹のエビから」「一杯の紅茶から」「一杯のコーヒーから」といった食べ物を通じて、グローバルなつながりに気づき、南北の関係のありようを考えるとという教材を作成、実践していた。1986年にはじめて開発教育全国研究集会に参加して、開発教育という言葉と出会い、同じように開発教育を実践している教師がいることを知った。

ところで、開発とはどういう意味だろうか。英語ではDevelopment。これを日本語に訳すと、開発、発展、成長、進展、展開などさまざまな意味がある。Developの反対語はEnvelopで、封をするという意味である。Developは、封筒の封を開けて中身を取り出すように、各人の持っている可能性を花開かせ、存分に自己実現するという意味で、それができる社会をつくることをめざすのが開発教育だ。

1970年代くらいまで開発は経済的な文脈でとらえられ、低開発は発展途上国固有の問題であると考えられていた。したがって、開発教育も、もっぱら遠い途上国の問題を扱っていた。しかし、前述したように、開発の本来の意味が理解されるようになると、途上国の貧困問題や南北問題だけではなく、人間の開発を阻む人権、環境、紛争などにかかわる諸問題も、そして、先進工業国における低開発の問題も関連してとりあげられるようになり、開発教育の概念も広がってきた。ここでは、前者を「狭義の開発教育」、後者を「広義の開発教育」と呼ぶ。そうすると、「広義の国際理解教育」と「広義の開発教育」、さらには「ワールド・スタデイズ」や「グローバル教育」も、それぞれ生まれも育ちも異なるが、その内容は共通する部分が多いということになる。

### 総合的な学習と開発教育

総合学習の主なねらいは「生きる力」を育てることと、「学び方を学ぶ」ことであろう。総合的な学習は、「教科」のカリキュラムの構成原

理とは異なる。「教科」は教科の内容が指導要領によって定められているが、「総合学習」は課題やテーマを中心に組み立てていくものである。その際、課題やテーマを学習者自身が見つけだすこともあろうが、いつもそうとは限らない。そこで、教師自身が取り組みたいテーマをつねに胸に温めておくことが大事であろう。

開発教育を総合学習にとり入れる際、4つのアプローチが考えられる（別紙レジメ参照）。文化理解、関係理解、問題解決、未来志向アプローチである。未来志向アプローチは、日本ではまだあまり実践が行われていないが、開発教育に深く関わっていると思われる。こうあって欲しい未来というのは、こうなるであろうという未来と、必ずしも一致しないであろう。だからこそ、どのように変化させていくのが望ましいのかを、考えることができよう。

ところで、変化の著しい現代は未来を予測することは難しい。最後に、25年先の世界のグローバルな動向を予測し、その動向に対応するために、どのような市民的資質を育成することが必要かについて、世界の有識者たちを対象に行った調査（Citizenship Education Policy Study、大津も参加した）の結果を紹介する（別紙レジメ参照）。これからの開発教育への一つのヒントになるかもしれない。

### 3. 平成13年中学校教師海外研修報告 旭川市立嵐山中学校教諭 上村育代

ザンビアへの研修風景を、現地撮影ビデオにて紹介。

その後、現地撮影の写真を引き伸ばしたものを壁に数点掲示。参加者を小グループに分け、あらかじめ説明をすることなく、順繰りに写真を回ってもらい、その写真から読み取れることをグループ内で意見交換、その結果を発表しながら、自らが見た途上国の実状を報告した。



#### 4. 参加型学習手法の学習

コメンテーター： 酪農学園大学助教授 高橋一

ファシリテーター： 開発教育ワークショップ研究会

小泉雅弘

都築仁美

「貿易ゲーム」は先進国と途上国の資源、資金、技術、の格差を前提とした貿易シュミレーションにより国際経済格差の増大、または格差是正等のヒントを感じ取るもの。

「宇宙人がやってきた」は、カナダで開発されたもので日本語によるマニュアルがまだできていないが、植民地支配の歴史を元に、価値観の違いによる侵略・搾取等の成り立ちを理解するゲーム。（別途アンケート結果あり）

#### 5. 参加型学習を行っての全体会議

コメンテーター： 酪農学園大学・短期大学部兼任助教授 高橋 一

(1) 「開発教育」とか「国際理解教育」を実践しようとする者が、その内容をまず自分自身の言葉と身体でハッキリと〈定義〉してみることが大切だと思う。なぜなら、その営みを経てこそはじめて、その内実を他者（生徒・学生）に伝達・共有することの意義への確信が与えられ、その目的が「普遍的価値に開かれた日本人」を育てる導きの糸であることを自分の言葉によって体感できるからだ。

(2) その事例として3種類の世界地図を提示したい。これらは私たち日本人がふだん見慣れていない地図である。南北が逆転している地図（オーストラリア）。日本が文字どおり極東にある地図（英国）。太平洋をはさんで日本が西側に描かれている地図（カナダ）。私たち日本人が小学生の時から見慣れている世界地図は、このJICA北海道国際センタ

一の各研修室にも大きな地図が備えられているように、日本が中心に置かれて記載されている地図である。すなわち、どの国や民族も、必ず自己中心的な視点から世界と他者と自己を認識していることがよくわかる。一面ではそれはやむを得ないし、また基本的な自己像の確立のために必要でさえあろう。が、同時に、私たちは空間的にも時間的にも自己中心的認識から免れていないという事実を心に刻みつけておくことも必要ではないか。それゆえ私が個人的に「開発教育」とか「国際理解教育」を〈定義〉しようとするならば、「世界・他者・自己認識における自己中心的傾向を克服するための教育的営みである」とさしあたって提示しておきたい。

(3) もう一つ、今回の二つのゲームに共通していた特色は、ゲームの中に終始豊かな「笑い」があったことだ。欧米だけでなく、東南アジア諸国では、「笑い」が日常生活や教育現場の中に自然に生かされていると感じる。カナダで直接聞いた言葉だが、親に「自分の子どもにどんな人間に育ってほしいと思うか」と尋ねると、少なからずの親が必ず「ユーモアのセンスをもった人になってほしい」と答えるという。ユーモアはけっして短絡的な頭の笑いではない。むしろ他者と自己を暖かく包み込むと同時に、適切な距離感を保持して、あるがままの自己と他者を受け止めようとする姿勢と関わる。それは異なる文化や風土、言語や宗教、顔立や行動様式を寛容と忍耐をもって受容する態度でもある。それは他者理解の基礎に必要な人間的資質だと私は思う。

## 6. 協力隊員等の活動報告・意見交換

ビデオ上映につづいて、別紙名簿による専門家、協力隊員 OB・OGとの意見交換等。

## 7. 閉会

千坂総務課長

今回の研修により参加者の方々は色々な情報を収集したことと思う。これを持ち帰り、自分なりに整理、分類、加工して、活かしていてもほしい。これらを自分のものに収得していくことが開発教育の第一歩ではないだろうか。それは即ち自分の意見として発言すること、それに責任をもつことにつながる。

金閣寺・銀閣寺のどちらが素晴らしいかと、かつて外国人に問われたとき、自分は漠然と「わびさび」の観点から銀閣寺と答えたが、何故かと更に問われたとき、自分なりの答えができず窮してしまった。自己主張を論理立てて説明できるということの重要性を思い知らされた。

本研修は、北海道国際センター（札幌）が初めて行った開発教育指導者研修であり、参加者の方々はその第一期生ということになる。教師・NGO合同参加の45名間の自主的なネットワークづくり、組織作りを期待している。それについてこれからもJICAはサポートしていきたい。

（名簿作り等については上村先生を中心に行うことで賛同を得た）

## 「伝えよう、大地を拓いた北の技術！」

JICA 北海道国際センター（札幌）所長 小森 毅

### 日本の発展の秘密を教えてください！

昔北大の学生だった頃、私は1年かけてアジア、中東、ヨーロッパ、アフリカを放浪しましたが、その時インドのとある村長から投げ掛けられた言葉がこれでした。「日本の発展の秘密を教えてください！」

自分（村長）が小さかった頃、習った世界史で日本は途上国であった。それがあっという間に超大国のロシアを破り、アメリカには破れ原爆まで落とされたが、すぐに東京オリンピックを開催するまでに復興した。インドと比べてみるとこれは奇蹟としか云いようがない、と言うのです。

当時若者の間に爆発的に流行った何でも見てやろう式の無銭旅行を、ただ世界を見てみたいからと始めた私は、世界は日本をこのように見てくれていたのかと愕然とし、その後ずっとこの村長への答えを考えてまいりました。

### 異文化での仕事

真の援助とは魚を供与することではなく魚の取り方を教える事だ、とよく云われます。確かにこれはその通りですが実はそう簡単な事ではありません。

魚の取り方を教えようと張り切って着任した専門家や協力隊員の人達がカルチャーショックを感じるのが先方の次のような対応です。

「網が壊れてます」「船を出したくても燃料がありません」……。

やっとの思いで同僚に網や燃料の申請をしてもらっても、何時まで待っても事態は動きません。問い質すと、「申請書は書いたが、後の事は自分の問題じゃない」「地方から親戚が来て課長がずっと出勤せず決裁がとれない」……。

彼等は怠け者ではありません。わざと意地悪しているのでも、ましてや能力が劣っているのでもありません。

価値観が違うのです。友人・家族への価値観の方が仕事への価値観よりも上なのです。価値観を責任感もしくは気配りと云ってもいいと思います。

異民族や異宗教のせめぎ合いのなかで、家族や友人しか頼るものが無く、生き抜く智慧として友人や家族への責任感を自然に選んだのでしょう。

だからこそ友人との茶飲み話や親戚とのつきあいは何にもまして大切ですが、

友か敵かも分からない人間のために仕事をするなどは馬鹿げたことなのです。

逆に、ほとんど異文化とのせめぎ合いはありませんでしたが、厳しい冬のあ  
る気候にも拘わらず、集団での手間がかかる米を主食に選んだ日本の先祖は、  
生き抜くために稲作へのチームワークを優先せざるを得ず、結果的に仕事への  
責任感を優先することになったのだと思います。

## 技術を支えるチームワークが技術力

日本独自の生産性向上の取り組みに「5S」という言葉があります。「整理、  
整頓、清掃、清潔、しつけ」の頭文字のSをとったものです。

少し説明させて下さい。

整理：組織の一人一人が自らの受け持ち分と全体の無駄を排除する

整頓：無駄が無くなった流れのなかで自分と機械の持ち場を把握・準備する

清掃：毎日掃き清め、汚れがある都度原因を探る。(毎日我が身を振り返る)

清潔：一人一人がこれらの点に頑固なまでに気配りをする雰囲気を作る

しつけ：仕事への責任感と気配りを育成する

5Sは自ら技術を磨き仕事を完璧にこなしつつ、他の仕事や全体についての  
調和の取れた気配りを求めています。(頑固な自己研鑽と他への気配りです)

それは、一人一人があてがいぶちの決められた仕事だけをこなすものではな  
く、経営者と同じ自主的な参画意識なのです。

これが自助努力による和の社会の根本、日本発展の秘訣なのだと思います。

人間は集団の動物です。仕事は集団で行ってまいりました。技術を磨きなが  
ら集団で社会を発展させてきました。しかし何に責任感を置くかによって技術  
力に差が出ます。つまり技術力とは個々の磨かれた技術と責任感によって支え  
られたチームワークの巧みさといえるのです。

## 見つけた！日本発展の好事例—北海道

北海道は開発途上地域から先進地域へ130年余という短期間で急速に変貌  
をとげました。それは現場の問題を自分の問題と考えた、いわば参画意識を持  
った先人達による開発の歴史といえます。ひとつの例を申し上げます。

「北海道の住宅は明治以来の移住者が出身地の様式を持ち込んだため、非常  
に寒い住宅であったが、昭和28年、生活文化の確立なくして総合開発は期し  
得ないと、北海道防寒住宅建設等促進法が初代民選知事によって公布された。

同法に基づいて、北大と道立研究所が防寒住宅の技術開発を、そして道庁の建築指導センターが啓蒙活動を、さらに住宅供給公社が販売体制の確立や公庫融資の上乗せ等経済支援を、とそれぞれが問題解決に奔走した。

これは現場で物事が円滑かつ迅速に実施されるように、道の施策を単なる法的措置のみならず、試験研究開発や啓蒙・普及事業そして経済支援に至るまで総合的に行ったものであった。

さらに民間は建築士会を通じ施工技術を普及し、全体として防寒住宅の研究、生産、啓蒙、販売、財政支援等の効果的なシステムが構築され、極めて短期間に北海道の住宅事情は一変した。」(北大大学院瀬戸口助教授より、文責小森)

さらに私どもは北方圏センターさんをお願いして北海道で元気のある10の市町村の地域振興の事例を調査しました。

農地開墾から生産性向上に至る技術的な「農業振興」と同時に、産業振興やまちづくりのための「農村振興」に力を注いだ北海道の取り組みは、途上国の地域開発に多くの示唆があると思われたからです。

そして素晴らしいことに大変重要な幾つかの要諦が浮き彫りにされました。

滝川市の農産物とジンギスカン、鷹栖町のトマトジュース、小清水町の地力活性型有機農法、池田町や富良野市のワイン、浜中町の酪農、下川町のカラマツ木炭、黒松内町のブナ林、北竜町のひまわり、幌加内町のそば、等単なる「素材」を開発の「資源」に転化した着目力の素晴らしさと、それに情熱を注いだ人々の存在、および行政、農民・住民、農協、試験研究機関等の多様な住民力の結集による各種のネットワーク構築、さらに国や道の各種施策を地域の力量に合わせて取り入れた自助努力……。

北海道では風土に合った技術の開発と共に、地域で暮らす様々な人達との連携のシステム(チームワーク)も併せ構築せねばならなかったのです。

千年、二千年という長い歴史を経て分かり難くなっている本州とは異なり、北海道では日本発展の秘訣(ノウハウ)とも云うべきチームワークの巧みさが歴史の中に凝縮しており、それこそが、個々の技術はあってもなかなか組織力、住民力にまとまらない途上国に最も必要な発展の要諦なのです。

まさに北海道は途上国にとって学ぶべき宝の山なのです。

## 文化は異文化で磨かれて成長する

人の振り見て我が振り直せ、とよく云われます。われわれは様々な人とのつ

き合いによって自分を磨き成長するのだと思います。

文化もこれと同じです。自分の文化に立脚することは勿論ですが、独善的にならず、カラに閉じ籠もらず、他の文化から学び合う柔軟性と強さが必要です。

異文化との共存というのは生易しいものではありません。発展のための連携のチームワークを築くどころか、簡単にいがみ合い、簡単に嫌悪感を持ってしまいがちです。とくに経済的利益が絡んでくると差別や紛争、そして戦争にまで発展しかねません。

ほとんど異文化との共存体験のない我々には計り知れないものがあります。

異文化に不慣れな我々は、異文化のせめぎ合いの現実に接すると、ただ驚いて同情の涙を流すか、逆に、嫌悪感でカラに閉じ籠もるかどちらかで、やがてあまり異文化とは縁も責任も無い安逸のなかに戻ってしまいます。

しかし世界の人達は、自分の文化に誇りを持ちつつもカラに閉じ籠もらないように、互いに嫌悪感を持たないように、また持たれないように、社会の絆を築くために様々な智慧を絞りながら社会の発展に汗をかいているのです。

そこでは容易には発展のためのチームワークは築けませんし、時には諍いもありましょう。それでも共に暮らすために広範な英知を培っているのです。

それは他人への最低限の責任感の発露（これを人はマナーといいます）としての「挨拶」であり、家族への責任感「家族愛」や友人への責任感「友情」であり、人として自分が帰属する社会を守る責任感「倫理観や信仰心」なのです。

今、我々が途上国から学ばねばならない事はたくさんあるのです。

## 我（JICA）、協力の架け橋たらん

「創業は易し、守成は難し」と云われます。

この言葉は、社会は時として創成期の切磋琢磨を忘れ、今の平和と繁栄が以前からあったと思ひこみ、現状に甘んじ進取の気性を失って形式主義に陥り、さらに、社会への責任感を無くして気配りを単なる物分かりの良さと勘違いし、技術に対する頑固な自己研鑽を無くし、やがて内側から崩壊し易くなってしまふ事を言っているのだと思います。

国際協力は、今の創成期の人達に我々の創成期の経験を伝え、発展の参考としてもらうことですが、素晴らしいことはその人達のメガネを通して我々の創成期の切磋琢磨が再認識でき、活性化できると云うことです。

そして更に素晴らしい事は、異文化からその文化の英知を学べると云うこと

です。協力とは片方の努力だけでは決して達成されません。自分の文化に誇りを持つと共に互いに学び合って共に発展する。これが国際協力です。

難しい「守成」を成し遂げるには新たな創業が必要でありましょう。今、日本にはそして北海道にはこの新たな創業—国際協力が是非とも必要です。

JICA は地域の皆様と途上国との架け橋になりたいと強く念じており、国際協力の様々なメニューを用意しています。途上国と北海道の元気のために……。是非一度ご相談下さい。それでは当センターのキャッチフレーズをご紹介申し上げます。これを締め括ります。

**「伝えよう、大地を拓いた北の技術！」**

—以上—



地球市民を育てるために  
～総合学習で開発教育をどう展開するか～

北海道教育大学 大津和子

1 現代世界の特質

文化的多元性 (cultural diversity)

相互依存性 (global connection)

2 教育の現代化

現代世界、社会の要請に応える教育～教育内容の現代化

グローバル・イシュー

結果よりプロセスを重視する教育～学習方法の現代化

多様な学習活動、参加型学習

3 新しい諸教育

国際理解教育 (大戦後冷戦時代以降ユネスコ提唱、度々名称変更)

異文化理解教育

開発教育 (1960年度以降欧米、1980年代以降日本でも)

国際教育 (1974「ユネスコ国際教育勧告」)

環境教育 (1970年代以降欧米、1980年代以降日本でも)

人権教育 (1980年代以降欧米中心)

平和教育 (1980年代以降欧米中心)

グローバル教育 (1980年代以降アメリカ中心)

ワールド・スタディズ (1980年代以降イギリス中心)

多文化教育 (1980年代以降欧米中心、1980年代以降日本でも)

#### 4 開発教育とは何か

開発 (Development) とは？

開発教育の発展

第1期 (1970年代～80年代中) 途上国の人々の現実を理解する

第2期 (1980年代～90年代) 私たちとの関係を認識し、何ができるかを考える

第3期 (1990年代～) 地球市民を育成する

開発教育の意義

途上国への関心 (欧米中心主義からの脱皮)

教育方法の改革 (教育全般への普及)

市民運動としての教育 (NGOとの連携)

#### 5 総合学習のねらい

新設の背景

教科との違い

「総合」の意味

総合学習の意義

#### 6 総合学習における開発教育4つのアプローチ

文化理解アプローチ

関係理解アプローチ

問題解決アプローチ

未来志向アプローチ

総合学習における開発教育の可能性

#### 7 21世紀にどのような資質を育てるのか～CEPS調査結果から

## Citizenship Education Policy Study インタビュー質問項目

- 1 今後25年間にどのような地球的な動向が人々の生活に大きな影響を及ぼすと考えますか？
- 2 そのような動向に対応するために、どのような市民的資質や特性が求められると考えますか？
- 3 そうした資質や特質を育成するためには、どのような政策が必要であると考えますか？

### 1. 人々の生活に大きな影響を及ぼす動向 Global trends

- a. 国際間でも一国内でも経済格差が拡大するだろう。
- b. 情報技術の発達により個人のプライバシーが縮小するだろう。
- c. 情報にアクセスできる人とできない人との不平等が拡大するだろう。
- d. 環境問題をめぐって南北の利害対立が激化するだろう。
- e. 安全な水を得るコストが増大するだろう。
- f. 森林枯渇の影響が深刻化するだろう。
- g. 途上国の貧困層の人口が増大するだろう。

### 2. 求められる資質 Citizenship

- a. 地球社会の一員として問題を見極め問題に立ち向かう能力
- b. 他者と協力し、社会の中で自己の役割や義務に対して責任を果たす能力
- c. 文化的な相違を理解し受け入れようとする寛容な態度
- d. 批判的かつ体系的に考える能力
- e. 非暴力的な方法で紛争を解決しようとする態度
- f. 環境を保護するため、生活様式や消費習慣を変えようとする態度
- g. 人権（女性、少数民族その他）を尊重しようとする態度
- h. 地域社会、国家社会あるいは国際社会の政治に参加しようとする意欲と能力

### 3. 多次元的市民性 Multidimensional Citizenshipの提唱

- a. 個人的次元
- b. 社会的次元～経済的、文化的、教育的、社会的、政治的、精神的領域などを含む市民活動の多様な場で、熟考し討議できる能力
- c. 空間的次元～地域、国家、国際のレベルでいくつもの重なり合う社会のメンバーとして考え、行動する能力
- d. 時間的次元～過去の遺産と将来に影響を与える可能性をも含めて、幅広い時間枠の中で考え、行動する能力

(Cogan,J.J.&Derricott,R.(1998)Citizenship for the 21<sup>st</sup> century:An International perspective on education.London,Kogan Page)